

目的 日本の持家住宅の供給方式は建売住宅と注文住宅に大別される。コーポラティブハウスは後者に属し、主として協同で土地を購入し自由設計による集合住宅を建設するという方式である。本方式では住み手の意見をより反映した住宅造りがなされていると考えられるが、台所の設計に関していえば、やはり集合住宅供給の合理性追求の観点から敷地内での住戸の位置、水まわり・ダクト関係の配置等、戸建注文住宅と比較するとかなりの制約を受けているというのも現実である。そこで本研究では、この台所に視点を置き、コーポラティブハウスの台所の特徴と問題点を解明することを目的としている。

方法 上記目的達成のため、近年建設されたコーポラティブハウスで京阪地区内の8地域を対象に選び、留め置き法によるアンケート調査を、昭和61年10月の約1ヶ月間実施した。調査内容は、住宅全般に関するものとして住宅平面図・設計者・広さなど、台所に関するものとして収納評価・収納家具所有状況、改善計画・台所観などを調べた。そしてその実態と問題点をより詳細に浮かびあがらせるため、著者が昭和55年に戸建注文住宅の台所について実施した調査結果と比較することにした。

結果 今回の対象住宅は①完全自由設計②準自由設計住宅に分類できた。戸建注文住宅を③とすると、①は②③よりi)K形式が多いii)居住環境が良いと考えられる方位（東・南東・南）が多いiii)収納評価の満足度は高いが不満層も多く、改善計画をもつ家庭も多いなどの事実が確認された。そして、これらの結果が水まわり等の固定化による設計というコーポラティブハウス特有の条件と、どのように関連しているかについて考察がなされた。